不知火海・球磨川流域圏学会誌
J. Jpn. Soc. Shiranuikai & Kumagawa Reg. Stud.
Vol. 13/14, No. 1, 2020, pp. 55-66.

【平成 31 年研究発表会基調講演記録】

球磨川からみた坂本の建築物

森山　学 [1)*]

1 熊本高等専門学校建築社会デザイン工学科　〒 866-8501　熊本県八代市平山新町 2627

要　旨

球磨川流域の熊本県八代市坂本町には，球磨川とともに生きてきた生活文化が現在も残っている．それらと当該流域の建築物との関係性について論じる．対象は，近世の藤本五所神社，中津道阿蘇神社，古田阿蘇神社，近代の鶴之湯旅館である．神社は水に関する祭神を祀り，生業の場となる川沿いに建つ．装飾も水をテーマとする．鶴之湯旅館は荒瀬ダムの建設と撤去に関連する来歴をもち，荒瀬ダムを観光に活用し眺望を活かす建築的特徴をもつ．いずれも球磨川と深い関連性をもつことがわかった．

キーワード：近世神社，近代旅館，球磨川，鶴之湯旅館

I はじめに

球磨川に沿う八代市坂本町には，球磨川とともに生きてきた生活文化が現在も残っている．それは建築物についても同様で，球磨川での生業や信仰などが建築物の配置，平面計画や装飾などに反映されている．本稿では，これまで十分に論じられることがなかった坂本町の建築物について，球磨川との関係性を中心に，その建築的特徴を明らかにする．ここで論じる対象は球磨川の時代変化も配慮し，近世の神社建築と近代の旅館建築とする．前者は藤本五所神社，中津道阿蘇神社，古田阿蘇神社を，後者は鶴之湯旅館を取り上げる．

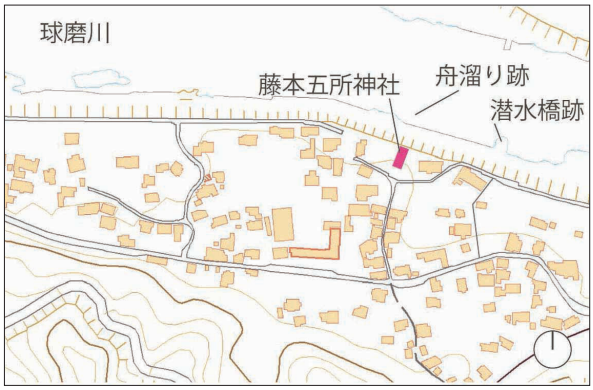

図 1　藤本五所神社の位置
（国土地理院地図に加筆）

II 坂本の神社建築

II-1　藤本五所神社（五社宮）

藤本は球磨川が大きくカーブする右岸にあり，大門の集落に隣接し，沿岸最大規模の集落である（図 1）．集落に沿って大きな川原があり，藤本五所神社付近で舟溜まりを形成した．球磨川水運の中心地だった藤本では，かつて多くの舟師もいたようである [1, 2)]．また，神社の下流側，清水瀬（またはそのご瀬）の辺りには合志野の渡しがあり，昭和 33 年（または 36 年）にはその上流部に潜水橋が架けられた [1, 2)]．現在も潜水橋の遺構（図

*Corresponding author: e-mail: m-moriya@kumamoto-nct.ac.jp

2）が見られる．集落からこの潜水橋の遺構へ続く坂道も残っているが，現在は堤防により遮られている．旧村道がこの堤防に沿い，神社正面へ至る．集落の東端，下流側には藤本発電所（昭和30年）があったが，荒瀬ダム撤去に伴い解体された．

図２　藤本五所神社の下流側に残る潜水橋の遺構

II-1-1　由緒と建築的特徴

境内は球磨川沿岸の高い護岸上にあり，社殿は川のある北を背にし南を向く．集落を貫通する県道中津道線から社殿正面に向かい参道が伸びている．祭神は天照大神，応神天皇，天津児屋根命，底筒男命，健磐龍命の五柱．大日如来の梵字を書く石も安置されていて，神仏習合を伝える．

旧村社である．延暦年間（782-806）に創建され（五社宮由緒記），相良長毎による八代統治（永正元年＝1504）以降に再建された（「八代郡誌」では大永年間（1521-27）[3]）．阿蘇十二明神を信仰する相良氏が，健磐龍命を祀るための再建であったろう．航海の神，底筒男命を祀る点は球磨川水運の安全祈願のためと考えられ，そのため舟師らも信仰したようである．ただし，後述の二社の社殿が球磨川に向いているのに対し，藤本五所神社では背を向けている．この点は社殿が南を向いている点に着目すれば，特に天照大神を祭神とすることから理解できる．

「八代郡誌」が「往古当社は繁栄し頗る大社なりし」[3]と形容した社殿は，天正年間（1573-92）に焼失した．その後加藤正方によって再建され，現在の建物は，本殿が棟札より文政９年（1826）[1, 4]，拝殿・幣殿は「五社宮由緒記」より大正14年（1925）（「坂本村史」には大正３年[1]）に，それぞれ改築された．また，鳥居は社殿より古く元禄14年（1701）と銘記されている．この鳥居は社殿と参道を結ぶ軸線上から外れ，異なる向きを向く（図３）．

図３　社殿と参道の軸線から外れた鳥居

II-1-2　建築的特徴

本殿（図４）は三間社流造である．大正14年（1925）に葺き替えられた銅板葺きの屋根の鬼板と大棟に，阿蘇神社の社紋，違い鷹の羽紋に通じる，丸に違い鷹の羽紋が掲げられている．拝殿の鬼板にも見られる．向拝（ごはい）は組物を中央柱に出三斗（でみつど），端部柱に連三斗（つれみつど），木鼻を中央柱に雲文の拳鼻（こ

図 4　藤本五所神社の本殿

ぶしばな），端部柱に獅子鼻，獏鼻とする．中央間の中備（なかぞなえ）を十六菊紋の蟇股（かえるまた），手挟（たばさみ）を中央柱に雲文，端部柱に牡丹とする．

このうち菊紋は菊花彫刻として，本殿正面の琵琶板の彫物，拝殿向拝の蟇股（かえるまた）に反復される．拝殿向拝の方は十六八重表菊である．大正時代建築の拝殿は皇族の紋章である十六八重表菊を，紋としてではなく彫刻として表現したのであろうが，これらはいずれにしろ祭神である天照大神や応神天皇に由来した題材であろう．ちなみに明治 4 年（1871）に皇族以外の菊紋の使用が禁止されるものの，明治 12 年（1879）には十六八重表菊紋を除き社寺での利用が認められたようである．釘隠しにも十二菊紋が使用されている．また，雲の図像は一般的な彫物ではあるものの，建物全体の水のテーマに関連する．水のテーマはここでは防火以上の意味があると思われる．獅子と牡丹の組合せは左側面の妻飾りで反復される．

右側面の妻飾りは上へいくほど壁は外側へ迫出している．柱上の二手先（ふたてさき）の組物で二段階突き出し大虹梁（こうりょう）を支え，梁上の出組の中備でさらに一段階，虹梁を突き出す二重虹梁とする．最上部の笈形（おいがた）は，天上の雲から滝のように激しく水が流れる様子を表現する．滝の下には梁から琵琶板にかけ雲がたなびき，狭き琵琶板に押し込められた水神・龍が，雲間に身をくねらせて，とび出すエネルギーを内に蓄えている（図 5 (a)）．龍の下，彫刻板支輪の上段に再度雲が彫られ，下段には波頭が彫られる．その下に波を駆けるとされる幾分鈍重な麒麟（図 5(b)）と，波を泳ぐ亀（玄武）がある．球磨川の

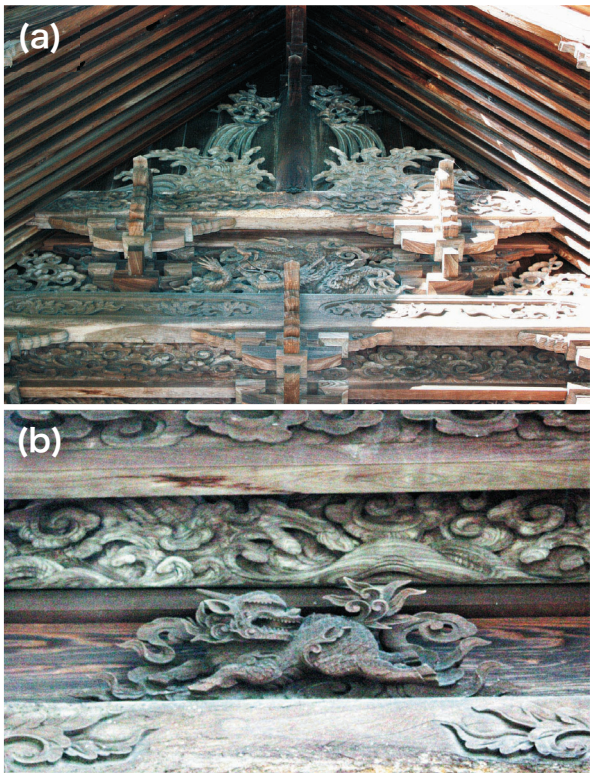

図 5　本殿右側面の妻飾り (a) と麒麟 (b)

流れを聞き，迫り出してくる怒涛の滝と彫刻群を見上げれば，３Ｄ映画のような迫力である．

左側面では龍に代わり，雲海から突き出る山岳に遊ぶ獅子と牡丹，麒麟・亀に代わり，雲上を飛ぶ鶴と波間を飛ぶ飛龍がある．背面では雲文と波頭の彫刻板支輪の下にもみじ，おしどり，カキツバタを彫り，静かな水辺を描く．

II-2 中津道阿蘇神社

八代市坂本町の中津道，鎌瀬橋上流の右岸に中津道阿蘇神社がある（図 6）．神社の下には川原があり，川原をいかだ口としていたようである．その横を宮瀬が流れる[1, 2]．境内地は石積み擁壁でそのまま川の護岸を形成する（図 7）．下部はコンクリート擁壁で覆われている．「球磨川の絵図」（天保 7 年，1836）によれば，この境内と川原の間に当時は街道が通っていたようである．社殿はこの川と街道の方角である北西を向いて建つ．現在は境内背面の国道 219 号線から境内に沿って川へ下る坂道があり，この道に鳥居が立てられている（図 8）．街道からこの坂道を上って鳥居に至っていたことが，先の絵図から分かる．荒瀬ダムが建設され水深が高くなってからは，この坂の下から舟に乗っていたようである．

図 6　中津道阿蘇神社の位置
（国土地理院地図に加筆）

図 7　川原から見た神社の社殿

図 8　国道 219 号線から神社の境内に沿って球磨川へ下る坂道と，その左側に建つ鳥居

II-2-1 由緒

中津道阿蘇神社は，阿蘇神である健磐龍命と比咩御子神を祀る．「坂本村史」によれば[1]，それぞれ永禄 12 年（1569）および永禄 6 年（1563）の銘をもつ観世音菩薩絵像や金銅製懸仏なども安置されていて，神仏習合を今に伝えている．創建年は不明だが，「坂本村史」[1]には天正年間（1573-92）の創建とも，相良氏家臣の蓑田家が創建したとも書かれており，また同じく相良氏家臣で観世音菩薩絵像の願主・宇治吉忠が祈願社として利用したともある．阿蘇十二明神を信仰した相良氏がこの地を統治した時代に創建したと考えられる．

この健磐龍命は水神としての本性を有する．球磨川への畏敬から治水や水運の安全を祈願したであろう．そのため，社殿は川に向かい，同時に旧街道からの参拝者に正対し，舟師も川原から社殿を見上げたことが想像できる．ただし，絵図の表現から，現在と同様，境内を街道に直接開かず，横の坂道に鳥居を立てたと考えられる．

II-2-2　建築的特徴

本殿は三間社流造である．向拝（ごはい）の中央柱は組物を絵様舟肘木とし，木鼻，手挟（たばさみ）を略す．端部柱は組物を大斗肘木とし，木鼻を獅子鼻や象鼻に，手挟を雲文にする．身舎（もや）の組物も簡素で平三斗（ひらみつど）とする．正面の中備（なかぞなえ）には瓜，びわ，花桐を彫った蟇股（かえるまた）がある．瓜やびわは繁栄，実り，長寿を意味し，高貴な花桐は鳳凰と組み合わせることが多い．その鳳凰は左側面の妻飾りに登場する．左側面は鳥居から入って正面にあたり，実質的なこの社殿の顔となる（図 9 (a)）．

この妻飾りでは，巨大な鳳凰が宙を急降下している（図 9 (b)）．妻飾り全体は，大瓶束（たいへいづか），笈形（おいがた），虹梁（こうりょう），肘木，頭貫（かしらぬき）のすべてに流動的な雲が彫られている．鳳凰はその雲を突っ切っているかのようである．鳳凰は丸彫りの立体的な彫物で，肉厚な翼を丸々とした胴体から左右に大きく広げ，正面に首を突き出す．その頭には冠羽が載る．ただし，顔は地面を向いている．尾はやや丸みを帯びた尖った形状をし，その一枚一枚が大きく広がり，湾曲しながら前方に垂れて突出する．この彫物が取り付けられている琵琶板に，鋸歯状の尾が左右に広がっているが，これは蟇股のひれであり，実は鳳凰は蟇股彫刻であることがわかる．鳳凰の下には一対の阿吽の麒麟が雲間をかけており，鳳凰はその二頭の間を降下していく．霊鳥と霊獣の長がそろい踏みしたかたちであり，麒麟たちは鳳凰の降下する様子を見上げているようでもある．

右側面の妻飾り（図 10）も見てみると，中央に鋸歯状の尾をひれとする蟇股（かえるまた）があり，ここに阿蘇神社の社紋である「違い鷹の

図 9　中津道阿蘇神社の建物の特徴．(a) 鳥居側から見た社殿，(b) 本殿左側面の妻飾りにある鳳凰

図 10　本殿左側面の妻飾り

羽」紋が彫られている．この紋は屋根の鬼板と大棟にも見られる．この蟇股の下には鋭い歯をもつ鯱が一対，阿吽の表情で波間を泳ぐ．鯱は，社紋で表現された水神である健磐龍命を見上げているようである．「違い鷹の羽」紋の蟇股がある位置に，藤本五所神社の場合は龍の彫物があった．健磐龍命はその名にあるように龍神＝水神であったことから，偶然にも，両神社は同じ位置に同テーマの図像を施していたことがわかる．背面には一間ずつに，菊が彫られた蟇股がある．左右の中間には十二菊，中央は十四菊である．菊はびわとともに長寿を意味する．

拝殿は入母屋造妻入り向拝つきで，全体に吹き放しである．左側面には腰壁もない．境内で，社殿が建つ辺りは階段五段分高くなり，腰壁がない側面はこの階段を向いている．境内の低い方から階段越しに拝殿を見上げれば，それはちょうど壇上の舞台のようである．低い方は八代市指定天然記念物「中津道阿蘇宮の森」の大木，玉垣，五段の階段，拝殿に囲まれて，素晴らしい苔の広場となっている（図 11）．また，拝殿の天井（図 12）は全体が田の字型に四分割され，棹（さお）縁（ぶち）天井の棹が各々，交互に向きを変え，卍を形成するように張られており，数寄屋風である．

図 11　苔の広がる境内の広場から見た社殿

図 12　拝殿の天井．天井の棹が各々，交互に向きを変え，卍を形成するように張られている．

II-3　古田阿蘇神社

遥拝堰付近，上流側の右岸に古田地区がある．遥拝堰によって球磨川の流れは穏やかであるが，もともとが流れの緩やかな地域だったようである．現在は川沿いの県道 158 号線（中津道線）が堤防上道路となっており，境内と球磨川を分断している．「球磨川の絵図」（天保 7 年，1836）にも同じ位置を街道が通っていて，街道の河畔側には広い古田の川原がある．近年まで境内の隣に 2 軒の造船所があった [1,2]．境内の下流側に

図 13　古田阿蘇神社の位置
（国土地理院地図に加筆）

は高田の渡しがあったが，昭和 49 年の遥拝堰完成により廃止された．渡し場はおそらく境内の北側に隣接する坂道を下り，県道下のカルバートトンネルをくぐった辺りにあったのであろうか（図 14）．対岸にあった渡し場付近には，豊葦原神社がある．集落は県道と山裾にはさまれた木の葉状の形態をなしている．社殿は山裾の高台に築かれ球磨川を向き，境内は県道まで，つまり集落の幅いっぱいを占め，かつてであれば川原や球磨川に連続していたことと推察される．

図 14　カルバートトンネルから見た球磨川

II-3-1　由緒

古田阿蘇神社の祭神は，阿蘇十二明神のうち，健磐龍命，阿蘇都比咩命，國龍神，比咩御子神である．称徳天皇天平神護年間（765-767）に創立され，醍醐天皇昌泰 3 年（900）に当地に遷座された．天正年間（1573-92）に社殿が焼失し，その後，加藤正方の時代に復興された [3, 4]．旧郷社である．細川三斎時代（1632-46）の修復以後，何度か改築，修復の記録が見られるが，現在の本殿については，文化 6 年（1809）および弘化 3 年（1846）の棟札がある [4]．拝殿は明治 35 年（1902）の建築であったものを，平成 27 年にそれをほぼ踏襲するかたちで改築された．

II-3-2　建築的特徴

境内の東側の山裾に，石積み擁壁で造成された三段のテラスがある．最上段に幣殿，本殿，一段目に拝殿がある．平地には石鳥居が立つ（図 15）．凝灰岩製の鳥居は，肥前石工・村山兵太夫により，元禄 9 年（1696）に建造された明神鳥居である．これは八代市内最古の鳥居で，重厚な意匠である．笠木・島木，貫は三本継ぎ，柱は二本継ぎで，亀腹には繰形（くりかた）がある．その鳥居の前には一対の大きな石灯籠がある．屋根

図 15　神社の境内の全景．手前から一対の石灯籠，鳥居，拝殿，最上段に幣殿と本殿が配置されている．

には唐破風があり，右側の鳥居の唐破風には，兎の毛通しに阿蘇神社の社紋に通じる「丸に違い鷹の羽」紋がある．屋根など一部をビシャン仕上げにする．

鳥居から直進して一段目のテラスの階段を上ると，拝殿がある．一段目の擁壁は川石を積む．拝殿は入母屋造平入りで，規模は桁行三間，梁間二間である．周囲に擬宝珠 (ぎぼし) 高欄がつく縁側がまわっている．9 段の階段がつく高床であるが，全体の高さ調整のためにも床高を高くする必要があったと考えられる．拝殿の背面にも回り込んでいる縁側から，最上段の幣殿，本殿へと十四段の石段が続く（図 16）．

図 16　拝殿から本殿へと続く 14 段の石段を仰ぐ

図 17　本殿の向拝（ごはい）柱の組物の 1 つ，龍頭の木鼻

この石段には切妻屋根が架けられていて，その左右には各々，片流れ屋根の板間が設けられている．対をなすこの板間は，拝殿との高さの差が階段一段分しかないが，これは拝殿をずいぶんと高床にしているためであり，実はこの板間は二段目のテラスの上に建っている．この二段目のテラスと最上段のテラスの高低差が大きく，そのため十四段の石段は急勾配である．その分，神殿へ続く聖なる道のりが演出されている．

石段上の幣殿は，奥行が 1.3 m ほどで小さい．その先に本殿が建つ石積み基壇がある．この上段のテラスには自然岩盤が露出して盛り上がっていて，この岩盤を活かしつつ，必要に応じて盛土して基壇としている．本殿のすぐ後に JR 肥薩線に沿う細い旧道が通るが，この自然岩盤にブロック塀を立て境界としている．旧道側から見ると，塀を建設するには岩盤が不足している箇所に，切石を積んでいる様子がよくわかる．

本殿は一間社流造である．昭和 7 年（1932）に茅葺きを銅板に葺き替えた屋根には，鬼板，大棟に「違い鷹の羽」紋がある．向拝（ごはい）柱の組物は連三斗（つれみつど），木鼻は龍頭（りゅうず）（図 17）と獅子鼻である．特に，龍頭は体を渦巻く雲紋で表し，特徴的である．向拝虹梁（こうりょう）の中備（なかぞなえ）は蟇股（かえるまた）で，ひれの唐草が長く広がり，その渦が蟇股内部も満たしている．同じ蟇股が身舎（もや）にも使われている．身舎は柱上に台輪を乗せ，組物を出三斗（でみつど）にし，虹梁を受ける．その下の支輪は蛇腹支輪である．虹梁上の大瓶束笈形（たいへいづかおいがた）は，左側面を波に飛龍の笈形，右側面を逆さ獅子の笈形とする．この最上段から球磨川を眺められる（図 18）．水神（健磐龍命）が球磨川を見守り，舟師や街道を行く人からは，斜面をせり上がる社殿を拝み見上げることができた．

図 18　本殿最上段のテラスからの眺望．奥に，球磨川を望む

III 鶴之湯旅館

鶴之湯旅館の前身「土山茂商店」は，荒瀬ダム建設（昭和 30 年）により水没・移転した家屋 119 軒のうちの 1 軒である．本来は，現在の葉木橋（昭和 53 年）袂の球磨川右岸に位置し，魚介販売や宿泊業を営んでいた．当該地が水没し，現在地へ移転，旅館業を営むようになる．旧「商店」前には旧県道，葉木の渡し場があった．現在はダム撤去により，県道の石積み護岸，渡し場の遺構，商店のコンクリート基礎が露見している（図 19）．移転先は江戸時代からの温泉の湧出地で，「肥後國誌」[5] には俗称「クサ水」，「球磨川の絵図」（天保 7 年，1836）には「湯辻」，「クサ水」という地名が記されている．現在湧出している温泉は，旅館直下の球磨川護岸に流れ出ている．

図 19　ダム湖に沈んでいた土山茂商店の基礎

図 20　遊覧船を運行していた当時の船着き場のコンクリート造階段

荒瀬ダム建設以前には，付近の川中に「湯の瀬」，「夫婦岩」，「かぶと岩」，「からす岩」，「弁慶岩」があった．これらはダム撤去に伴い復活した．荒瀬ダムは建設当初，観光地としてにぎわった．鶴之湯旅館では宿泊客の送迎のために，遊覧船を運行していた．現在は旅館横の護岸堤防に，当時の船着き場のコンクリート造階段（図 20）と鉄製はしごが残る．旅館業は一時期休業していたが，ダム撤去工事が完工する 2 年前の 2016 年に営業を再開している．

このように鶴之湯旅館は，地域の暮らしと密接に関連してきた球磨川，または荒瀬ダムの建設と日本初のその撤去といった歴史的変遷の一時代を象徴する．

III-1　建築的特徴

建物は木造三階建てで，一部に無筋コンクリート造または番線入りコンクリート造の地下室がある．屋根は入母屋造をコの字型にかける．施工は八代市内の井本工務店である．モデュールは京間内法制である．これは柱が約 133 mm 角と大きいためと考えられる．ちなみに，近隣の日奈久温泉街の木造三階建て旅館の柱はほぼ 110 ～ 120 mm 程度である [6]．鶴之湯旅館が大断面の部材を多く用意できたのは，地元の木材を使用したことに起因すると考えられる．

III-1-1．木造三階建て

慶応 3 年（1867），木造三階建て住居の禁止令が廃止され，建設が可能になる．木造建築統制規制（商工省令 67 号，昭和 14 年）が公布された当時は建設困難となるが，実質，建設が認められ

なくなるのは，昭和 34 年の建築基準法改正時以後のことである．このことから，鶴之湯旅館は木造三階建ての構法が建設可能だった約 90 年間の晩年期に建設されたものと言える（図 21）．3 階建てのため，料理運搬のダムウェーターを設置していた点は，設備計画上の特徴と言える．

図 21　鶴之湯旅館の北正面と建設当時はダム湖（現在は球磨川）に面する西面

図 22　居室には障子を立て，外周に縁廊下，木製窓枠の掃き出し窓，勾欄を設ける．ガラス窓を通してダム湖（建設当時）の眺望が得られた．

III-1-2　ダム湖を眺めることに特化した設計

建物は南北に長く，西側でダム湖に面していた（現在は球磨川）．この西側に多くの居室を配置する．居室には障子を立て，外周に縁廊下，木製窓枠の掃き出し窓，勾欄を設ける（図 22）．このため西立面は全長にわたり全階ともガラス窓であり，戸袋もない．1，2 階のガラス窓上部には出庇をかける．ダム湖を眺めることに特化した設計であり，当地の場所性をよく反映している．

III-1-3　非日常への入り口としての北正面

明治時代に生まれた旅館建築は一般に，宿泊者に非日常を体験してもらうことを目的に，数寄屋風意匠を贅沢に取り入れる．鶴之湯旅館では特に，北正面の立面を非日常空間への入口と見立てる．屋根には千鳥破風のように見える入母屋破風があり，2 階の収納と 1 階の玄関にも入母屋屋根をかける．さらに出庇，下屋がつき，全体多層の重厚な意匠が特徴的であり，西立面と対比的でもある．また，2 階には猪目（いのめ）の下地窓を開け（図 23），魔除け・火除けを兼ねつつ，意匠上のアクセントとする．玄関は矢筈（やはず）張りを含む猿頬（さるぼお）天井（図 24），うろが口開くサルスベリの床柱の座敷飾り，和洋折衷の

図 23　2 階には猪目（いのめ）の下地窓

図 24　玄関の矢筈（やはず）張りを含む猿頬（さるぼお）天井

図 25　玄関の和洋折衷の肘木を組む丸柱

肘木を組む径 223 mm の丸柱（図 25），松竹梅の釘隠し，と数寄屋風意匠が集中する．これも北正面と同じ意図であろう．

III-1-4　近代旅館建築としての間取りの特徴

団体旅行の流行を背景に，大正時代以降，全国的に，旅館に宴会用の大広間が設けられるようになる．鶴之湯旅館の 2 階には舞台付きの「広間」がある．続き間で，建具を開けると 28 畳敷きで利用できる．舞台背景には旅館名にちなみ鶴が描かれている．以前は離れ棟が南に建ち，1 階に 5 室の浴室，2 階に広間があった．互いの広間は 2 階で連絡できた．客室のプライバシーに配慮するのも近代旅館の特性だが，ここでは「佛の間」のある 1 階，「広間」となる 2 階は建具で仕切るものの，西側 3 階の客室は壁で仕切る．3 階縁廊下には居室ごとに区切っていた建具の戸当たりや蝶番の痕跡も残る．また，東側の客室は壁で仕切られる．これにより構造的には東に壁が集中し西に壁が不足する結果となっている．

III-1-5　数寄屋風意匠

玄関以外では西側居室の蝙蝠形の格狭間（ごうざま）透かしの欄間（図 22）が特徴的である．床に円窓の下地窓がつく客室もあるが，床のない客室のため置き床も保管する．

IV　まとめ

神社建築について

・藤本五所神社，中津道阿蘇神社ではかつての舟溜り，いかだ口の川原に面して建っている．古田阿蘇神社は造船所のある川原に面し，いずれも生業の場となる川沿いに建つ．
・中津道阿蘇神社，古田阿蘇神社は球磨川を向く．藤本五所神社は反対の南を向くが，天照大神が祭神であることが要因と考えられる．
・いずれも水神である健磐龍命を，藤本五所神社ではさらに航海の神，底筒男命を祀る．
・特に藤本五所神社では水をテーマとした装飾が施されている．

鶴の湯旅館について

・荒瀬ダムの建設と撤去に関連する来歴をもつ．
・荒瀬ダム時代の遊覧船の船着き場が残る．
・西側立面と居室の配置は，ダム湖を眺めることに特化した特徴をもつ．

V 引用文献

1) 坂本村史編纂委員会 1990. 坂本村史. 坂本村史編纂委員会編, pp. 244-250, pp. 414-424, pp. 772-777, pp. 879-881, pp. 889-890, pp. 1045-1083.
2) 熊本県教育委員会 1988. 熊本県歴史の道調査―球磨川水運―. 熊本県教育委員会編, pp. 103-116.
3) 石川愛郷 1927. 八代郡誌. 臨海書店, pp. 434-435.
4) 熊本県教育委員会 1987. 熊本県の近世社寺建築―熊本県近世社寺建築緊急調査報告書―, pp. 188-189.
5) 後藤是山編 1916. 肥後國誌, 下巻, 青潮社, 318 pp.
6) 塚本孝治・北野隆 2001. 近代の木造 3 階建てに関する研究―日奈久町の旅館の場合―, 日本建築学会九州支部研究報告 40: 617-620.
7) 球磨川の絵図 1836. 熊本県立図書館所蔵.

Histrorical architectures including shrines and a ryokan in Sakamoto town and their relationships to Kuma River

Manabu Moriyama[1)*]

1 Department of Architecture and Civil Engeneering, National Institute of Technology (Kosen), Kumamoto College, 2627 Hirayama Shinmachi, Yatsushiro, Kumamoto Prefecture 866–8501, Japan

In Sakamoto town in Yatsushiro City, Kumamto Prefecture, which is located along the middle reaches of Kuma River, traditional life styles and culture under the influence of the river remains still in the present days. In this paper, I introduce them and discuss their relationships with some of the architechtures remained from the early modern times including three different shrines and the late mordern ryokan, Tsuryunoyu Ryokan. These shrines worship the enshirined diety related to water, and were built along the river as the sites that support various activities of the residential people. The themes of the decorations of the shrines are also related to the water. Tsurunoyu Ryokan has had a long histroy related to the construction and removal of Arase Dum. It was built with the arichtechtual designs and structures to use for the tourism related to the lake formed by the dum. These all constructions have a strong relationships with Kuma River.

Keywords: early modern shrines, Kuma River, late modern ryokan, Tsurunoyu Rhokan

*Correspoinding author: e-mail: m-moriya@kumamoto-nct.ac.jp